

歌 集

落の臺



歌

集

落の臺

吉

岡

き

い

落の臺

(昭和五十八年六月のよき日に)

著者

吉岡 きい

昭和五十八年十月一日発行

川越市寿町一―二二七三―三
電話(〇四九二) 四二―一七六〇

印刷・製本

第一印刷 刷(株)(東松山市)

電話(〇四九三) 二二―〇四六〇 代

序

本歌集の著者吉岡きいさんが、熱心に作歌に励んでおられるということを聞き、私が、歩道入会を奨めたのは、昭和四十八年末ごろのことでした。吉岡さんは早速「歩道短歌会」に入会され、私達川越の「歩道二土会」の会員として共ども作歌の勉強をなされ、又吉岡さんの地元「大東短歌会」にも同郷の人々の一人として入会されて作歌に励まれ、今日も引き続き作歌精進の路を進んでおられます。

この度吉岡さんには、ご奇特な親戚の方のご好意並びに肉身のご協力により、自歌集を出版されることとなり、その編集につき私に協力依頼がありました。私はその壮舉に感動微力ではありますが、喜んでお力添えすることを約束いたしました。爾来その作品の整理編集につきいささか協力させて戴き、今日この歌集「路の藁」の出版を見るに至りました。まことに喜びに絶えません。

吉岡さんは、私が申し上げるまでもなく、すぐれた作歌能力をお持ちになり、心に感動したことは、次ぎ次ぎと短歌作品として表出されるといった形で、その

作品の主たるものは、必然的に自己の生活詠人生詠が多いようです。吉岡さんは、今日までの長い人生に於いて、早くご主人を亡くされ、苦しい農事と老父母や子供の養育そして貪苦との闘い、ひたむきにその人生ととり組んで生きて来られました。従ってその作品には、いずれも人生の真実が溢れてをり、読む人をして胸を打たせるものが多くみられるのです。

若くしてご主人を亡くされた悲しみは、序の章に於いて悲痛な叫びの如く歌われています。

五人の子遺して逝きし吾が夫も悲しからなむ黄泉の旅は。

さみしさのやりどころなし声上げて泣けば届くか黄泉の夫に。

我が子らに視線冷たくなげかける時もありき僻みにはあらず。

夫は逝き子らは幼し田畑荒れこの憤りいづこに遺らむ。

見るもののなべてが金に見えし如く金に飢えたる事もありにき。

序の章をはじめとして、吉岡さんの作品はその遺された五人の子の養育に、涙ぐましい苦心と愛情が注がれています。

わが娘書道に來るとひそやかにいなり寿司など作り待ちゐる。

温かく夜を寝かさんと息子らの布団干すなり作日も今日も。

ものの言へば息子は小言言ふもの言はで歌に詫さん千々の思ひを。

この頃は死なんと思ふ心おこる何の心ぞ涙そと拭く。

死にたしと思ふ心と生きたしと思ふ心といづれが真か。

自粛してゐる息子をばなぜ友は酒に誘ふやと我なげきゐる。

加害者の立場は辛し罪金の通達来たり事故をせし子に。

胸をかりて泣く人もなき生活に堪へて来にけり二十数年。

夫とは尊きものよかりそめにも罵るなかれと娘に教へぬ。

手打そば好む息子なれば病院の夕べの食事に替へてもて行く

恐れるし約束ごとの来し如き思ひに歎き事故の息子を見る。

事故を起した息子さん、そして更に反目二年という息子さんとの生活には又一層の精神的な苦痛を味われたようです。

長じては母の助言もままならず息子の反目二年に亘る。

霧深き朝のしじまに無花果の葉の落つる音もの悲しさよ。

事故をせし子の損傷車庭にあり人にも会えぬ詫びしさ辛し

その当時の作者の心痛はいかばかりであつたでしょう。作品を読むさへ涙なくしては読み得ないものです。

寝るのみに戻り来る子の布団干し屋根に涙す断絶の日日。

すでに体損ひて居り夜更まで外で呑む酒子はつつしまず。

後遺症いまだ癒えぬか言動の荒々しさに母我は泣く。

逢ふ毎に夫子を誇る友ありて耳おほひたし夫亡き我は。

そして又、吉岡さんの作品には、ひたむきに貧と闘い、生活をたてるための闘いがその息づかいを感じる如く詠まれています。

督促を受けて驚き税金と家計の残とを比べて見しか。

足弱くなるはいとはず目の悪くなるが悲しき和裁する我。

自らの墓地求めたく和裁して百万の金ためんと思ふ。

金に飢えし頃の苦しみ忘れ得ず年金は皆蓄へて持つ。

落ちてゐる壇の蓋さへ金に見えし事すらありて貧しかりけり。

山積の和裁に挑むスケジュール我の立てしは午前三時まで。

昼の間は多事多用にて座り得ず我の和裁は夜にはかどる。

夫も亡くボーナスも無き我なればひたすら和裁の山に挑むも。

午前二時部屋掃き終へて見上ぐれば雲一つなく半月冴ゆる

こうした中にも書道の練習などにも励まれ飛び上る程の喜び準師範に書

道合格の知らせを受けし

幾度か転びつ起きつの操り返しやうやく射止めし書道の師範を。

という作品をものしています。まことに驚くべきバイリテイといふべきです。吉岡さんもようやく老境に入り、その作品にも精神的に安定した作品が多くなって来ておるようです。但し娘さんやお孫さんの喘息などには常に尚心を痛めておられる姿が想像されます。

喘息の薬と聞けば露の臺娘来る日に調理して待つ。

咳すれば我が目にさへも火花出づ娘よ苦しからん喘息病めば。

公害の認定ならず喘息に苦しむ娘に三児幼なし。

天よ心あらばこの親子に幸を与え給へと祈らずに居られない感動を覚えます。
ようやう老年期を迎え、母を思い、故里を懐しむ作品も多く、又物心両面にも
安定を得て吉岡さんの境界も幸をおぼえ、安心の境地で日々を過されるようにな
って、心の安らぎを覚える作品が多く見られます。

夫の忌を一人悼みて食卓に梅酒の水割今宵口にす。

寡婦の手に育みし子ら人と成り敬老の日に我をもてなす。

田舎出を誇るが如く来客の都度に振舞ふ我が手打そば。

よろこびの酒に酔ひたき故里に肉親寄るは衷にちなむ時。

父母の亡き故里なれど外に無き安けさありて語り更かしぬ。

在りし日の母がせし事今我も芋がらをむき切干しを干す。

ただ一つ庭に成りたる草ばけの実をいとおしみ酒に漬け置く。

田舎出は日々の暮しに表われて寿司もむすびも大きく作る。

緑濃き葉に浮き出でて梔子くちなしの花は夜目にもま白かりけり。

花いまだおさまりきれぬ紫蘇の実をこげばほのかに秋の匂ひす。

隣り家の鉢植の茄子のぞきては樂しむ我も老いに近づく。

子は四人あれど老い先長男にたよると定め心安けし。

故里に人のよる時いつよりか我長老の座におさまれり。

激動の戦後を生きし寡婦われは敬老の日の膳に涙す。

金の無き事も不遇に泣く事も我に試練と思へばたのし。

長い苦難の人生を生き来り、ようやく辿り得た境地、吉岡さんの作品のいよいよ清澄崇高ならんことを心から祈念申し上げ序文といたします。

昭和五十八年六月八日

（歩道短歌会同人）

牛 窪 又 一

目次

序	(牛窪又一)	1
序の章		
夫栄次逝く	(昭和二十二年五月五日)	19
玉川の父死す	(昭和四十五年)	26
昭和四十七年		
大東文化祭入賞作	(四首)	28
雑歌	(三首)	29
真砂夫妻に贈る歌		31
秋深む		33
昭和四十八年		
年改まる		38
消極の日日		41

昭和四十九年

子を愛しむ

弟入院す

弟逝く

弟の葬儀

長男の事故

日常

田舎出

昭和五十年

無花果

冬に向ひて

故里を思ふ

捨て猫

短歌会

安穩の日日

71	69	67	65	64	62	58	55	53	51	48	47	44
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

断絶の日日

……
73

昭和五十一年

次男豊治結婚の歌

……
76

草津の旅

……
78

早春

……
79

残り布

……
82

子の自立

……
84

昭和五十二年

母を思ふ

……
88

草木瓜

……
90

亡き弟を思ふ

……
92

春雨

……
93

娘と孫

……
95

老の境地

……
97

昭和五十三年

後遺症

薬草

農育ち

新設の池

夫の忌

通り雨

長男入院す

傷心

嘆きの友

ネオン街の裏通り

昭和五十四年

書道準師範に合格

歌の友

117	116	114	113	111	109	107	106	105	103	101	100
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----